

# 第一コリント書5章における パウロの説諭（レトリック） — 黙示的終末論の機能について —

## Rhetorical Function of Apocalyptic Eschatology in Paul's Argumentation in 1 Corinthians 5

村山 盛章  
Moriyoshi Murayama

キーワード

ニューレトリック、黙示的終末論、第一コリント書、論敵、二元論、サタン

### KEY WORDS

New Rhetoric, apocalyptic eschatology, 1 Corinthians, opponents, dualism, Satan

### 要旨

第一コリント書5章の議論においてパウロはユダヤ教黙示的文書に見られる法廷的伝承と宇宙論的伝承を持ち込んでいる。法廷的伝承を利用することで、近親相姦を犯した者、あるいはその他の悪徳を犯す者の自己責任を厳しく問うている。それによってパウロは個人の行為に対する神の終末審判を喚起させ、信仰者に行動規範を提示している。また、宇宙論的伝承を利用することで、人間の不品行を宇宙論的文脈におき、その位置づけを通して宇宙における神に敵対するサタンの勢力、そしてキリスト信仰共同体内の連帯とそこからの離脱の重大性について周知させている。ローマ帝国支配による社会的安定と平和に依拠している論敵にとって、このような終末審判と二元論的世界観を強調するパウロの言説は衝撃的であり、破壊的ではあつただろう。しかしパウロの言説には、かつて十字架の言葉を信じ、聖霊を受容し、終末論的信念に到達したことのある論敵に現在の彼らの思想的偏向を是正させるに足る説得力があつたと思われる。

## SUMMARY

In 1 Corinthians 5 Paul brings two traditions from Jewish apocalyptic literature: the forensic tradition that features individual accountability in the eschatological judgment and the cosmological tradition that features hostile spiritual agents represented by Satan active in the realm outside the kingdom of God. By appropriating the forensic tradition, Paul places the immoral man's actions in an anthropological context that allows him to hold the immoral man accountable in light of eschatological judgment. By appropriating the cosmological tradition, he places the immoral man's actions in a cosmological context that warns the community of Satan's power in the cosmos as well as the consequences of being removed from the community. Paul's opponents, who were dependent upon social stability and peace provided by the imperial rule, would find Paul's arguments offensive and subversive. However, Paul's argumentation would be persuasive enough to make his opponents reshape their cultural and social ethos into a more apocalyptic-eschatological one because they had once believed in the cross of Jesus Christ, received the Holy Spirit, and engaged themselves in eschatological enthusiasm.

### 1. 問題の所在

信徒のひとりが近親相姦を犯したにもかかわらず、コリント教会はその事件を放置し、結果として黙認していた。しかも教会のリーダー格で、この世的な知識や地位のある信徒たちは自分たちを他人に誇ることに忙しく、信仰の仲間が犯した深刻な罪とそれに付随する信仰共同体への悪影響を全く意に介していなかったようだ。このようなコリント教会の姿勢に憤慨したパウロは、パン種のたとえ、過越祭のたとえ、贖罪的キリスト論、悪徳表、申命記法（申命記17章7節の引用）を駆使しながら、コリント教会の信徒たちに信仰共同体内に生じている性的不道徳を適正に処理し、信仰共同体を健全に維持するよう論じている。従来の研究では、旧約聖書やヘレニズム哲学に見られる伝承を吟味し、そこからパウロの倫理勸告を分析することが多かった。また、5節の「サタンに引き渡す」という決定は破門命令あるいは呪詛の観点から考察されてきた。

本小論では先行研究に学びながらも、当時ユダヤ教に流布していた黙示的終末論の視点から考察することを試みる。パウロを含め初期キリスト教がこの世界観を共有していたことは疑い得ない事実である。しかしパウロの倫理勸告と説論（レトリック）

をこの世界観から積極的に考察した研究はあまり見られない。本小論はユダヤ教黙示的文書に見られる二つの特徴ある思想的伝承（法廷的伝承〈forensic〉と宇宙論的伝承〈cosmological〉）をパウロが援用しながら性的不品行の重大性とこの世から区別された聖なる信仰共同体の自覚をコリント教会に、特にリーダー格の信徒たちに促していることを明らかにする。また、説論の効用を考察する際、「ニューレトリック」からの洞察を利用する。

## 2. 法廷的伝承と宇宙論的伝承

パウロとユダヤ教黙示的終末論の関係は多くの研究者によって取り上げられ、議論されてきた<sup>1</sup>。パウロは黙示文学を執筆したわけではないが、黙示的終末論を共有していたことはほとんどの研究者が認めているところである。しかし、ユダヤ教黙示的文書に見出される多種多様な表象やモチーフの中からパウロは何を継承したのかについて意見の一致は見られない。その理由として、「黙示的」の定義が困難であること、研究者が前提とする異なるパウロ理解が多様な解釈を生みだしていること、そしてパウロ書簡が状況の異なる各キリスト教会へ宛てられたという特質、を挙げることができる。

このような中、Martinus C. de Boer はユダヤ教黙示的文書の中に二つの特徴ある伝承、すなわち、法廷的伝承と宇宙論的伝承を見出すことができると主張している。そして、これらの伝承がパウロ書簡において見られることを指摘し、パウロとユダヤ教黙示的終末論の関係を一定の説得力を持って論述している<sup>2</sup>。

宇宙論的伝承は天的・宇宙的エージェント（作用者）が繰り広げる様々な出来事とそれらに翻弄される人間世界を描いている。この世は宇宙的悪の勢力によって支配されており、人間は自分たちの力でその勢力を打ち負かすことはできない。そのため人間は神がこの世に介入し諸悪を殲滅することを強く信じることになる。最終的には神や神的勢力がサタンや悪霊と宇宙規模で戦いを演じる。神の勢力は悪の勢力に勝利し、神を信じていた義人たちは報われ、不義・不信仰者は宇宙的悪の勢力と共に永遠に葬られる。以上がこの伝承に流れるモチーフである。また、この伝承に特徴的なこととして、「神の子たち」（創世記6章1-6節）のエピソードを敷衍することで悪・罪の根源を説明していることを挙げることができる。

例えば、第一エノク書（エチオピア語エノク書）1-36章には「神の子たち」のエピソードが大幅に拡張されて描かれている。天上から人間世界を眺めていた天使（墮落天使）たちは美しい人間の娘たちを好みに応じてめとり（1エノク6:1-7:1）、人間に魔術、流血、姦淫、占星術などを教える（7:1-8:4; 9:1-9）。天使たちの妻は巨人を生み

(7:2; 9:9)、それらはのちに「悪霊」として地上にはびこることになる(15:8-12)。そのため人間は腐敗に陥り、地上全体は大いなる悲しみに包まれていく。邪悪な霊(悪霊)によって不法や墮落が人間世界に引き起こされることはヨベル書にも描写されている(ヨベル11:4-5)。このように天使と人間の娘によって生み出された悪霊によって、人間は地上に悪をはびこらせていくのである<sup>3</sup>。主人公エノクはこのような腐敗した世界で聖なる天使から幻を受ける。そして彼を中心として選ばれた義人の集団が出来上がっていき(1エノク1:2-3, 8)、彼らは「来たるべき日」に神が悪霊や墮落天使を滅ぼすまで信仰を失わず希望をもって耐え忍ぶのである(1:9; 10:4-16; 16:1; 19:1)。

以上から宇宙論的伝承では、罪や悪の原因を墮落天使とその子孫である悪霊に帰せていることが分かる。つまり、悪の根源と蔓延について人間世界の次元ではなく、宇宙的次元で解釈、説明が施されている。それゆえこの伝承では、神と悪との宇宙的ドラマを展開しながら、両者の宇宙規模の最終戦争をもってクライマックスを迎えるという筋書きがしばしば見られる。その典型がクムラン教団の「戦いの書(1QM)」である。この文書は終末時における「光の子ら」と「ベリアル軍勢と闇の子ら」との戦いを具体的に描いている。彼らの戦いには7つの戦闘があり、3つの戦闘で「光の子ら」が優勢となり、別の3つの戦闘では「闇の子ら」が優勢となる。7つ目の最後の戦闘で神がベリアル軍勢と闇の子らを殲滅させる(1QM1:11-15)。大祭司を司令官とし、戦闘隊形・作法、武器の寸法など詳細で具体的な事柄が描かれている(1QM15:1-19:11)。これは当時のギリシア・ローマ世界の戦法知識を示しており、恐らくクムラン教団はローマ帝国に対する現実の戦闘を前提にしていたようだ<sup>4</sup>。しかし同時にこの戦闘は「神・光の子・光の君主」と「ベリアル・闇の子・破滅の天使」という宇宙的次元での戦いとして認識されている。「戦いの書」ほど具体的ではないが、神と悪の宇宙的対立構図はクムラン教団の他の文書や1エノク書、ヨベル書、「十二族長の遺訓」などにも見られる。

一方、法廷的伝承はこの世の腐敗と墮落の原因を天使や悪霊といった天的エージェント(作用者)ではなく人間に帰している。そして、「神の子たち」のエピソードの代わりに、アダムとイブの楽園追放の物語(創世記3章)を利用しながら罪と死の根源を説明する。例えば、第4エズラ書ではアダムはその罪のゆえに非難されている——「ああ、アダムよ、あなたは何ということをしたのだ。あなたが罪を犯した時、墮落したのはあなただけではない、あなたから生まれた私達(すべて)なのだ」(4エズラ7:118)<sup>5</sup>。この伝承ではアダムがすべての罪と邪悪の原型として捉えられている(その他に、4エズラ3:5-7, 20-27; 4:30-32; 2バルク17:2-3; 23:4; 48:42-43; 54:19; 56:5-6)。但しアダムを罪と死の原型として見なすことは、その子孫である人間の責

任を不問にすることを意味しない。第2バルク（シリア語バルク黙示録）54章19節は端的にこれを表わしている。すなわち、「アダムは彼自身に対してのみ責任があり、われわれすべてが各人自分のアダムである」（その他に2バルク54:15-16）<sup>6</sup>。また、法廷的伝承では、律法を遵守すること、しかも神から啓示を受けた者（啓示者）による正しい律法解釈に従うことが義人の定義である。そのような義人たちのグループのみが救われる（4エズラ7:17, 60, 88, 94; 8:3; 9:14）。他方、啓示者に従わず、律法を蔑ろにする者、あるいは義人たちを迫害する者は（7:20, 37, 72, 81; 8:56-57; 9:11）、不義・不信仰の輩として最終的には滅んでいく（8:1, 3; 9:15）。興味深いことに、法廷的伝承には悪の宇宙的エージェントの姿はほとんど見当たらず<sup>7</sup>、神が悪の勢力と戦う宇宙規模の最終戦争も描かれていない<sup>8</sup>。その代わりに、終末時に公平な裁判官である神が律法遵守の観点から今までの個々人の行いを吟味することが強調されている（4エズラ6:25-28; 2バルク15:5-6; 44:14-15; 48:45-50; 54:15-16）。このように法廷的伝承では人間は自分の行為について個人的責任が問われ、それは最後の審判を左右するという終末論的警告が与えられていると言える。

以上の考察から第二神殿時代の膨大で雑多に思われるユダヤ教黙示的文書の中に、宇宙論的伝承がおもに1エノク書やヨベル書において、一方、法廷的伝承がおもに4エズラ書や2バルク書において見られることが分かる。しかし、de Boer 自身認識しているように、これら二つの伝承は二つの異なる文学類型を創出するものではない。事実、これら二つの伝承を等しく内包する黙示的・終末論的グループもしくは文書が存在する。それはクムラン教団（1QS 1-4; 1QM; CD）とパウロ書簡である。パウロ書簡ではアダムの物語（1Cor 15:21-22, 45-49; Rom 5:12-21）や人類の罪と神の裁きの議論（Rom 1:1-5:11）が見られ、それは法廷的伝承として、一方、神やキリスト、聖霊に敵対するもろもろの悪の勢力（サタン、悪霊、擬人化された死や罪など）は宇宙論的伝承として見なすことができるだろう（Romans 6-8; 16:20; 1Cor 2:6-8; 5:5; 7:5; 15:24, 26, 56; 2Cor 2:11; 4:4; 11:14; 12:7; 1Thess 2:18）<sup>9</sup>。次に、1コリント5章にこれら二つの伝承が見られることを考察する。

### 3. 1コリント5章における法廷的伝承と宇宙論的伝承

このテキストにおける法廷的伝承は個人の行いに対する裁きにおいて明白である。5節に出てくる肉（σάρξ）と霊（πνεῦμα）が何を意味するのか、また、サタンに引き渡された不品行者は何を体験するのか議論の余地がある（死、病気、悔い改めなど）<sup>10</sup>。しかしこれらの問題点を別として、明白に言えることはパウロが不品行者に対してひとつの判決を下しているということである。つまり、近親相姦を犯した信徒

はその不品行のためにサタンに引き渡される。この厳格な宣告は他のコリントの信徒たちに対して性的不品行を行わないよう警告する役目を持っていたであろう。性的不品行だけでなく、パウロは11節で悪徳表を引用しながら、処罰の対象となる他の不品行を示し、そのような不品行者とは一緒に食事をしないよう戒めている。また、続く6章で別の悪徳表を示しながら、悪徳を行う者は来たるべき「神の国」を受け継ぐことができないと断言している（6:9-10）。このようにパウロは主の日（終末）において、それまで行ってきた行為に個々人が責任を負うということを強調している。5章11節で悪徳表を提示するとき、パウロは「神の国」について言及していないが、5章11節の悪徳（みだら、強欲、偶像礼拝、悪口、酪酊、略奪）のすべてが6章9-10節の悪徳表に含まれている。つまり、5章11節で言及されている悪徳を行う者は、「神の国」を受け継ぐことができない、ということである。近親相姦を犯した信徒をサタンに引き渡すという判決は、「神の国」を受け継ぐことが出来ないという終末審判の先取りとも言えるだろう。信仰者であっても悪徳を行う者は終末審判を免れることはできないのである。このようにパウロの倫理勧告が終末審判という警鐘を鳴らすことで自己の行為に対する個人的責任の自覚を促していることが分かる。これは上記で考察したユダヤ教黙示的文書の法廷的伝承が所持するモチーフである。

法廷的伝承は5章だけでなくこの手紙の他の箇所にも散見される。すでに見た6章9-10節に加え、たとえば、3章10節～4章5節や11章27-32節を挙げることができよう。妬みや争いに従事しているコリントの信徒を「肉に属した、この世的な (σαρκικός, σάρκινος)」存在であると非難したあと（3:1-4）、パウロは幾つかの終末論的警告を述べている<sup>11</sup>。ひとつは信仰共同体を築き、育てるためになされた業は終末において「火 (πῦρ)」を持って吟味されることである（3:12-15）<sup>12</sup>。その火に耐えることが出来ない業は滅ぼされるという終末論的警告を提示することで個人の士気を高め、より良い業に励むことを促している。また、信仰共同体である教会は神の神殿であり、それを破壊する者を神が破壊する (φθείρω)<sup>13</sup>という厳粛な警告が語られる（3:16-17）。破壊者が具体的にだれなのか説明はないが、前後の文脈から神殿を破壊する者とは2章14節～3章4節でパウロが批判した党派主義に陥っている者、すなわち、ψυκτικός, σαρκικός, σάρκινοςと形容される信徒をおもに示していると言えよう。党派主義に陥っている者はキリスト信仰共同体の一致を揺り動かしているだけでなく、破壊という裁きを将来被ることになる。終末審判のモチーフは4章1-5節でも再び取り上げられ、そこでは神に仕える者としての使徒パウロを含め、人間が受ける裁きは神による裁き以外にあり得ないことが強調されている。

11章27-34節ではコリント教会が現在、経験している事態について言及している。つまり、暴飲暴食という節度を欠く行為のため病人や死人が続出していることである

(11:30)。主の晩餐での振る舞いを再吟味し、自己規制を促す直接的な警告としてパウロはこの事態を取り上げている。しかしながら、究極的な行為の動機づけは終末審判の想起にあり、この世と並んで信仰者が断罪されることがないようにパウロは警告している（11:32）。換言すれば、この世と共に断罪される可能性が現在の振る舞いによって増減するということである<sup>14</sup>。

このように5章を含めパウロは具体的な倫理勧告を行うとき、個人の行為に対する神による終末審判（賞罰）をコリントの信徒に喚起させ、それを行動規範として機能させている。

さて、5章に見られる宇宙論的伝承はサタンという登場人物によって明示されているが、霊（*πνεῦμα*）、主の力（*δύναμις*）<sup>15</sup>、破壊（*ὄλεθρος*）<sup>16</sup>といった一連の語彙においても明らかである。コリントの信徒たちが集まっているところにパウロの *πνεῦμα* が主の *δύναμις* と共に臨在し、まさにその機会にコリント教会は不品行者を *σάρξ* の *ὄλεθρος* のためにサタンに引き渡すのである（4-5節）。主の *δύναμις* は終末時にあらゆる悪の勢力を破壊する威力を持っている。ここに二つの陣営が対立している。それはパウロの *πνεῦμα* と主の *δύναμις* からなる陣営と滅びに至る *σάρξ*<sup>17</sup> とサタンからなる陣営である。この対立構図は神の勢力と悪の勢力との宇宙論的相克を示しており、紛れもなく宇宙論的伝承が前提としているものである。

このような二元論的世界観は5章だけでなくこの手紙に一貫して流れている。クムラン教団の「戦いの書」で言及したように、この種の二元論は人間社会と宇宙的次元とが重複して展開されることがある。クムラン教団にとってローマ帝国とその軍隊は「ベリアル・闇の子・破壊の天使」という天的エージェントと同じく神に敵対する陣営に属している。パウロの場合、サタン（*σατάν*）（1コリント5:5; 7:5; 2コリント2:11; 11:14; 12:7; ロマ16:20; 1テサロニケ2:18）や悪霊（*δαίμονια*）（1コリント10:20-21）、この世の神（*ὁ θεὸς τοῦ αἰῶνος τούτου*）（2コリント4:4）、諸霊（*στοιχεῖα*）（ガラ4:9）などの天的エージェントに加え「この世の支配者（*ἄρχων*）」や「この世の知恵」が神に敵対する陣営に属している。特に1コリント1章から4章でパウロは「神の知恵（キリストの十字架）」に敵対する「この世の知恵」という対立構図を前面に押し出している。1章19節でイザヤ書29章14節を引用しながら、神があらゆる人間の知恵を無効にしたことを告げる。この世の知恵を代表する「賢人、哲学者（*σοφός*）」、「学者、ユダヤ人律法学者（*γραμματεὺς*）」、「論客（*συζητητής*）」（1:20）と「キリストの十字架」を宣教するパウロ自身を対峙させている。彼は十字架の言葉を宣教する際、「言葉の知恵」（1:17）、「高尚な言葉や知恵」（2:1）、「説得力のある知恵の言葉」（2:4）、あるいは、「人の知恵に教えられた言葉」（2:13）のいずれも使用しなかった。彼の宣教のことばは「霊（*πνεῦμα*）と神の力（*δύναμις*）」（2:4-5）、あるいは、「霊に教えら

れた言葉」(2:13)によって語られた。そして「神の国」とは人間の知恵による言葉ではなく、パウロが関わっている神の霊と力に存在するのである(4:19-20)。

このようなパウロの主張はキリスト信仰が当時のギリシア・ローマ社会の価値や理想と一線を画することを意味する。そしてこのことが神の意思に沿ったものであることをパウロはコリント人の召命体験(1:26-31)や彼自身の使徒としての姿を例証として挙げながら論述している(4:10-13)。つまり、コリントの信徒たちが召された時、多くの者はこの世的な知恵や能力がなく、家柄もなかった類の人たちであった。神はそのような彼らを選びだすことでギリシア・ローマ社会に属する知者・エリートたちを無価値とした。また、愚かで、弱く、侮辱され、この世の屑とされているパウロがまさに「キリストに仕える者」であり、「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」(4:1)である。このような逆説的事態が神の知恵の具現である十字架の出来事によって生じているのだ、と。

2章6-11節でパウロは「この世の支配者(ἄρχων)」に言及し、彼らは「神の知恵を理解せず、キリストを十字架につけた勢力」であり、「滅びゆく(καταργέω)」運命にあることを語る<sup>18</sup>。ἄρχωνが人間の為政者を指すのか宇宙的エージェントを指すのか議論がある。しかしすでに触れたように黙示的思想では人間世界と宇宙世界との共時的存在がしばしば前提とされる。さらに、ダニエル書(10:13, 20, 21; 12:1)、ヨベル書(15:31-32)、1エノク書(89:59-67; 90:20-27)などにあるように、神に敵対する天的エージェントが人間の為政者であるἄρχωνの背後にいわば守護神のように存在すると信じられていた。パウロがユダヤ教黙示的文書の宇宙論的伝承を引き継いでいたことを考慮するなら、彼がἄρχωνに言及するとき人間の為政者と同時に悪の宇宙のエージェントも念頭に置いていたと推測できる<sup>19</sup>。またパウロはこのように神に敵対する悪魔的勢力に対峙する存在としてキリスト信仰者を描写している。信仰者は「世の霊」ではなく「神の霊」を受け、「この世の知恵」ではなく神秘としての「神の知恵」(黙示的知恵)を理解する者である。すでに考察したようにパウロはその神の知恵を「霊」に教えられ、「神の力」の働きに支えられて宣教したのである。

これらの考察から以下の対立構図が分かるであろう。すなわち、「この世の知恵」、「賢人」、「学者」、「論客」、「知恵ある者」、「知恵にあふれた言葉」、「人の知恵」、「この世の支配者」、「この世の霊」からなる陣営と、一方、「神の知恵」、「十字架につけられたキリスト」、「神の秘められた計画(神秘)」、「(神の)霊」、「神の力」からなる陣営である。この対立構図を前提に、パウロは信仰共同体の「聖なる者」に対してこの世の裁き手を「不義者」、「教会から疎んじられている者」、「不信仰者」と判断する(6:1-11)。また、既婚者は「この世の苦勞」や「世の事柄」(7:28, 32-35)を背負い、この世の「有様(σχήμα)」<sup>20</sup>は過ぎ去ると描写する(7:31)。さらにこの世の神殿での



食事を「主の食卓」と決して相容れない「悪霊の食卓」（10:14-22）と表現している。

キリストの出来事（死と復活）を契機に二つの相反する現実が生じたのである<sup>21</sup>。この世に代わる新しい現実をキリスト信仰共同体（ἐκκλησία）が体現している。この共同体はこの世に存在するがそれに属さず「神の国」を受け継ぐ聖なる共同体である（1コリント4:20; 6:9-10; 15:23-24, 50）。今はまだ悪の勢力が活動し信仰共同体を脅かすが、キリストが再臨したとき、キリストはすべての支配者たち（ἀρχή）、権威（ἐξουσία）、そして勢力（δύναμις）に対して宇宙規模の勝利を取め、最終的には死をも滅ぼす（καταργέω）（15:24-26）。終末の勝利は「神がサタンを足の下で打ち砕く」とも表現される（ロマ16:20）。現代人には理解しにくい世界観であるが、1コリント5章の背後にこのような二元論的宇宙規模のドラマが存在していることを忘れてはいけない。サタンと「肉」は滅ぼされる陣営に属し、パウロの「霊」や「主の力」は最終的に勝利をおさめる陣営に属している。

次にこのような法廷的、宇宙論的伝承を援用したパウロの議論はどのような目的と効果を狙ったものなのか吟味してみる。

#### 4. パウロの説諭（レトリック）の効果

1980年代ごろから古代修辞学をパウロ研究に利用することが、特に英語圏で顕著になり始めた。それらのアプローチはアリストテレスの修辞学理論（『弁論術』）を土台に構築された古代修辞学的技術から、パウロの手紙やそこに見だされる議論を分析するものである。その分析は多岐にわたり研究成果も多様であるが、この種の方法を一般に「修辞学的批評」と呼んでいる<sup>22</sup>。その中で本小論が最も注目するアプローチは「ニューレトリック」と呼ばれるものである<sup>23</sup>。このアプローチは古代修辞学を基礎に論理学や哲学を取り入れることで古代修辞学が本来所持していた「説得的言論」の技術を復興することを目的として考案されてきたものである<sup>24</sup>。中世以来、単なる「文彩論」に限定された結果、凋落の一途を辿った修辞学を本来のレトリックへと復興、かつ拡張させることを目指す新しい試みである。このアプローチがニューレトリックと呼ばれる由縁である。このアプローチでは、公の場集った者（特に法廷）に聴衆を限定する古代修辞学と異なり、あらゆる種類の聴衆を想定する。そのため聴衆の性質、主題の性質が何であれ、「説得説伏」のために施されるあらゆる議論を対象とする<sup>25</sup>。ニューレトリックにおいて修辞は単なる形式、文彩の類ではなく、説得説伏のための「議論法」として概念化され、議論とそれを強く誘引した社会的歴史（人物、出来事、対象、関係性など）を「修辞学的状況」として定義づけていく<sup>26</sup>。

この点で様式史批評の「生活の座」に符号する部分があるが<sup>27</sup>、テキストとそれが対象とする聴衆との相互作用、それもテキストが聴衆の信念や意向を変更させる目的を持っている状況下での相互作用に特に関心を寄せる点で「修辞学的状況」は特徴的である。それゆえ、ニューレトリックにおいては、言論の説得説伏力は、言論が社会的文脈において含蓄された価値をどの程度持っているのか、そしてそれが聞き手の関わり合いを創出・確保し、聞き手に行動を促すことにどの程度機能しているのか、という観点から評価される<sup>28</sup>。これは真偽を決定する分析的議論（例えば、数学の定理証明など）と大きく異なる点である。つまり、レトリックを読み解く鍵は言論を他者への影響と伝達を司る手段として捉え、その言論が持つ社会的力学（ソーシャル・ダイナミクス）を鑑みることに存在する<sup>29</sup>。

ニューレトリックが提供する洞察を利用することで、パウロの議論が持つ説得説伏力を吟味することができる。1コリント5章の修辞学的目標は聴衆（手紙の受信者）に対して近親相姦を犯した信徒を信仰共同体から取り除くことを訴えることである。パウロはこの訴えの中で上記で考察したように、二つの黙示的伝承を持ち込んでいる。法廷的伝承を利用することでパウロは近親相姦の行為を個人の責任行為に関連づけ、終末論的審判の観点から不品行者の責任を厳しく問うことに成功している。そして、宇宙論的伝承を利用することで不品行者の行為を宇宙論的文脈におき、その位置づけを通して宇宙における神に敵対するサタンの勢力、そしてキリスト信仰共同体内の連帯とそこからの離脱の重大性について周知させることに成功している。換言するならば、これら二つの黙示的伝承はコリントの信徒に対して、「神の公平な賞罰」と「二元論的世界観」を突きつけているといえる。前者は信徒の日常の行為に対して揺るぎない指針を提供し、悪徳を犯さないよう効果的に警告していると言える。この警告は終末に至るまでキリスト信仰者をして道徳的営みを保持させる機能を果たしている。一方、二元論的世界観は、「神の国」の先取りであるキリスト信仰共同体に敵対するこの世とサタンの王国の存在を自覚することを促す。この世界観においては、神の国に属する者（もの）とサタンに従属し、悪霊に支配された者（もの）という二陣営しか存在し得ないのである。

C. Perelman と L. Olbrechts-Tyteca は「議論はそれが語られている人々の忠誠・支持を獲得することを目的とするので、影響を与えようとする聴衆すべてに関連するものであり、議論はある特定の聴衆のために仕組まれた総体である」と語っている<sup>30</sup>。議論は特定の聴衆の説得を目的として発生したものであり、それ以外の何物でもないということである。このことはパウロの議論にも当てはまる。黙示的伝承を持ち込んだ際、パウロは聴衆の考えや意向を変更させることを意図している。彼の説得説伏の内実を知るには議論が向けられている特定の聴衆の性質を吟味する必要がある

る。

この手紙はコリント教会に宛てられたものであり、コリント教会に集っている人々が手紙の受信者であり、パウロの議論の聴衆である。しかし教会内の特定のグループ、すなわち、「論敵」に対して彼の議論が向けられていることに注目しなければならない<sup>31</sup>。そして論敵の社会的状況を知ることは修辞学的状況を吟味する上で不可欠である。彼らがどのような社会的・経済的状況にあったかは今なお研究者の間で議論が続いている<sup>32</sup>。しかし拙論ですでに論述したように<sup>33</sup>、他の多数の信徒に比べて、論敵は比較的裕福で、教養があり、ある程度社会的地位も有していたようである。彼らはこの世、すなわち、ローマの植民都市コリントに融和、馴染んでいたと思われる。この世の知恵を身につけながら当時のギリシア・ローマ社会を根幹で支えていた「修辞の文化」に傾倒していた。古代の「レストラン」であった異教の神殿にも足繁く通い、社会的・政治的安定や昇進を目指しながら、都市コリントでの彼らのネットワークを築いていた。神殿祭儀への参加は権力当局による祭儀システム、さらにはローマ帝国の皇帝崇拜による支配に間接的に参与することであり、この世的価値と安定に依拠する彼らにとっては好都合であった。ギリシア・ローマの食事会における上流階級的風潮を享受していた彼らはキリスト信仰共同体での食事会（主の晩餐）で貧しい者を蔑ろし、共同体内に混乱を引き起こした。このようにこの世の価値観、理想に心を奪われ、都市コリントのエリート文化に傾倒していたのがパウロの論敵である。

また、彼らはキリスト信仰共同体であり、神の国を受け継ぐエクレシアにおいて仲違い、党派主義を引き起こしていた。そして、コリント教会内に生じている性的不品行や暴飲暴食を黙認あるいは放置していた。パウロの視点からすると、このような論敵たちはキリスト信仰者としての正しい自己定義に失敗しており、個々の行為のための指針を失っていたと映った。しかし彼らの自己定義は別の所にあった。彼らは世俗社会と融和しており、そのため経済的、政治的、文化的迫害を経験することもなく暮らしていた。それゆえ、彼らがこの世（パウロの黙示的世界観によるとサタンの王国）を安定した、平和で、利益をもたらす現実として肯定的に見なしていた可能性が高い。彼らの社会的文化的状況—教育を受け、裕福で、社会的地位があり、社会に十分同化している状況—が彼らの思想的気風を形成する上で役割を果たしたと思われる。そしてそれが彼らの自己定義を形作っていたのである。論敵のこのような志向はパウロの視点からすると黙示的終末論的観点を欠いたものである。R. B. Haysはこの点を「コリントの信徒はギリシア・ローマ世界の決定的に非終末論的な文化的状況に則して自己理解を形作っている」と説明している<sup>34</sup>。

終末審判を射程に入れた行動規範がなければだれも自らの行動に究極的責任を負う

ことを自覚しなかったであろう。黙示思想に基づいた二元論的世界観を持たなければ、誰も対立する二つの陣営を想定することは出来なかったであろう。ましてや信仰を持って集っているエクレスシアがこの世と一線を画した別の世界（「神の国」）に属しており、この世にあっても独自の統一体を築くべきであると自覚するには至らなかったであろう。パウロの論敵にはそのような自覚は薄く、信仰共同体であるエクレスシアの健やかな成長と自律を結果的に妨害していたことになる。悪の化身である肉欲による行為とその行為者を黙認することで共同体の聖性に汚点をつけておきながら、その事態の深刻さを理解していなかったのもそこに起因すると言えるだろう。そのような状況に対してパウロは法廷的、宇宙論的伝承を倫理勧告に持ち込み、この世の価値と理想を志向する論敵の思想的偏向を黙示的終末論的なものへと矯正しようと説得を試みているのである。無論、パウロが持ち込んだ終末時の神による賞罰と二元論的世界観というモチーフはコリント社会には相容れないものである。帝国の支配文化を醸成することに一役買っていた植民都市にとっては当然のことである。そこではローマ皇帝を頂点とする階級社会が支配しており、賞罰を行うのは皇帝であり、世界には帝国統治のみが存在するだけである。また、世の終わりや破壊をイメージする黙示的終末論は繁栄と永続を祈願し、「平和 (εἰρήνη)」と「安全 (ἀσφάλεια)」をスローガンに掲げるローマ帝国神学にとってタブーであった<sup>35</sup>。このような社会的政治的文化的エトスに埋没していた論敵にとってパウロの黙示的終末論的言説は破壊的であり、衝撃的であっただろう。社会的安定と平和に基づいた彼らの自己認識を揺り動かすものであっただろう。ここにパウロの言論が持つ社会的力学を見ることができ、この意味で彼の説論はある効果を発揮したであろう。

しかし、このことは論敵が全く黙示的終末論的思想を持ち合わせていなかったということの意味しない。でなければパウロの説論は全くの無駄に帰するからである。なぜならば、説得説伏の議論において、聴衆は話し手が議論によって影響を与えようとする人々の集合であり、話し手は議論展開の出発点において聴衆の同意を得ている必要があるからだ<sup>36</sup>。つまり、パウロが影響を与えることが出来るということは論敵に黙示的思想を受け入れる素地があったということである。聞き手を説得するためには聞き手が受け入れる前提が必要でそれがなければ議論は成立しない。この書簡に出てくるキリストの十字架、召命体験、聖霊受容などは聞き手が同意している説得要件である。論敵はパウロのコリントでの説教を受け入れ、キリスト信仰に入った信仰者である。パウロの福音のメッセージには1テサロニケ4章13節-18節にあるような「熱狂的に黙示的終末論的」なものがおそらく含まれていたであろう<sup>37</sup>。J. L. Sumneyは従来のパウロ研究があまりにもパウロと論敵の違いを強調し過ぎ、両者にはほとんど同意できる事柄がないかのような論調に陥っていることを批判している<sup>38</sup>。論敵といえ

ども黙示的終末論的出来事として「キリストの十字架」を受け入れ、信じたのである。その前提がなければパウロによる説論は生じなかったであろう。他の書簡に比べて1コリント書には「あなたがたは知らないのですか (οὐκ οἴδατε)」というフレーズが最も多く出てくる (3:16; 5:6; 6:2, 3, 9, 15, 16, 19; 9:13, 24)。9章13節、24節を除くと、すべてのフレーズは5章で議論されている論点に関連している。特に終末審判に関して、聖なる者たちがこの世と天使たちさえ裁くこと (6:2, 3)、そして悪徳を行う者は神の国を受け継ぐことは出来ないこと (6:9) をパウロは想起させている。かつて教えられ、信じたものを論敵に想起させることでパウロは事柄のまさに本質によって知らなければならない現実があることを論敵に指し示している。パウロは黙示的終末論的世界観が単に未来の事柄を指し示しているのではなく、現在の論敵の現実を究極的に規定していることを説論している。社会的安定と平和に基づいた論敵の自己認識を黙示的終末論的言説で揺り動かすだけでは説論は成功しない。論敵がかつて信仰に入ったとき経験した聖霊受容と彼らが到達した終末論的信念をパウロは法廷的、宇宙論的伝承を導入することで何とかもう一度想起、活性化させようとしているのである。このことを通してパウロはこの世に存在しながらも一線を画する聖なる信仰共同体の成長を目指したのである。

- 1 20世紀初頭、A. Schweitzer はパウロがユダヤ教黙示的終末論を共有していたことを論証し、その後のパウロ研究に多大な影響を与えた (A. Schweitzer, *Paul and His Interpreters: A Critical History* [London: A.& C. Black, 1912]; *ibid.*, *The Mysticism of Paul the Apostle* [New York: Macmillan, 1955])。研究史については以下を参照。R. B. Matlock, *Unveiling the Apocalyptic Paul: Paul's Interpreters and the Rhetoric of Criticism* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996), S. M. Lewis, *What Are They Saying About New Testament Apocalyptic?* (New York: Paulist Press, 2004)。
- 2 M. C. de Boer, "Paul and Jewish Apocalyptic Eschatology," in *Apocalyptic and the New Testament: Essays in Honor of J. Louis Martyn*, ed. J. Marcus and M. L. Soards (Sheffield: JSOT Press, 1989) 169–90; *ibid.*, "Paul and Apocalyptic Eschatology," in *The Encyclopedia of Apocalypticism*, Vol. I, *The Origins of Apocalypticism in Judaism and Christianity*, ed. J. J. Collins (New York: Continuum Publishing Company, 1998) 345–83。
- 3 興味深いことに墮落天使が地上で最初に行ったことは人間の娘との性行為であり、第一エノク書の著者はこの出来事によって引き起こされた穢れを強く問題視していることが分かる (1エノク10:11, 22; 12:4; 15:3–4; 19:1)。
- 4 Y. Yadin, *The Scroll of the War of the Sons of Light against the Sons of Darkness* (Oxford: Oxford University Press, 1962) 141–97; F. M. Cross, *The Ancient Library of Qumran*, 3<sup>rd</sup> ed. (Minneapolis: Fortress Press, 1995) 60–62。

- 5 邦訳は八木誠一・八木綾子「第四エズラ書」『聖書外典偽典5』（教文館）を参照。
- 6 邦訳は村岡崇光「シリア語バルク黙示録」『聖書外典偽典5』（教文館）を参照。
- 7 2バルク56:10-16は墮落天使の物語を反映しているが、それが2バルク書の主題として展開しているわけではない。
- 8 一方、第一エノクやヨベル書に代表される宇宙論的伝承は創世記2章～3章の物語的解釈があるにもかかわらず、アダムの罪についてはほとんど言及していない（参照、J. J. Collins, *Apocalypticism in the Dead Sea Scrolls* [London and New York: Routledge, 1997] 32）。
- 9 de Boer, "Paul and Apocalyptic Eschatology," 360–66。
- 10 サタンに引き渡された不品行者は死に至ると考える研究者は、たとえば、R. Bultmann, *Theology of the New Testament* (London: SCM Press, 1956) 1:233; E. Käsemann, *Perspectives on Paul* (Philadelphia: Fortress Press, 1969) 23; G. Forkman, *The Limits of Religious Community: Expulsion from the Religious Community within the Qumran Sect, within Rabbinic Judaism, and within Primitive Christianity* (Lund, Swed.: C. W. K. Gleerup, 1972) 145-46など。死刑判決ではなく悔い改めを導く罰則であると解釈する研究者は、A. Schweitzer, *The Mysticism of Paul the Apostle* (New York: The Macmillan Company, 1955) 330; J. T. South, "A Critique of the 'Curse/Death' Interpretation of 1 Corinthians 5.1–8," *NTS* 39 (1993): 545など。
- 11 詳しくは D. W. Kuck, *Judgment and Community Conflict: Paul's Use of Apocalyptic Judgment Language in 1 Corinthians 3:5–4:5* (Leiden: E. J. Brill, 1992) を参照。
- 12 「火」は黙示的・終末論的審判において使用される典型的なイメージのひとつである（イザヤ30:27, 30; 66:15; ダニ7:9–10; 1エノク10:6, 13; 67:13; 90:24–27; 4エズラ7:36, 38; 1QH14:18; マタイ3:10; 13:40, 42; 黙1:14; 2:18など）。
- 13 他の箇所ではこの動詞を終末的破壊に直結しては使用していないが<sup>8</sup>（1コリ15:33; 2コリ7:2; 11:3）、その派生語である φθαρτός（「滅びうる、有限の」）や φθορά（「破壊、滅び」）を終末審判による破滅を表すために使用している（1コリ15:53, 54; ロマ8:21; 1コリ15:42, 50; ガラ6:8）。
- 14 Kuck, *Judgment and Community Conflict*, 228。
- 15 δύναμις は第一コリント全体を通して使用されている（1:18, 24; 2:4, 5; 4:19, 20; 6:14; 12:10, 28, 29; 14:11; 15:24, 43, 56）。
- 16 ὄλεθρος は1テサロニケ5章3節で来たるべき終末的破壊に言及するときに使用されている。
- 17 パウロは「血（αἷμα）と肉（σάρξ）」は朽ちるものであり、神の国を受け継ぐことはできないと語っている（1コリント15:50）。
- 18 「滅びゆく（καταργέω）」はきわめて黙示的・終末論的用語である。この用語は神によるこの世の価値の無効（1コリント1:28）や黙示的・終末論的破滅（13:8, 10, 11; 15:24, 26）を表すときに使用されている。
- 19 C. D. Morrison, *The Powers That Be: Earthly Rulers and Demonic Powers in Romans 13.1–7* (London:

- SCM Press, 1960) 23–24; J. L. Kovacs, “The Archons, the Spirit and the Death of Christ: Do We Need the Hypothesis of Gnostic Opponents to Explain 1 Cor 2.6–16?” in *Apocalyptic and the New Testament: Essays in honor of J. Louis Martyn*, ed. J. Marcus and M. L. Soards (Sheffield: JSOT Press, 1989) 217–36; P. W. Macky, *St. Paul’s Cosmic War Myth: A Military Version of the Gospel* (New York: Peter Lang Publishing, 1998) 40; C. E. Arnold, *Powers of Darkness: Principalities & Powers in Paul’s Letters* (Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1992) 102-3.
- 20 W. Deming は *σχημα* を結婚生活を継続させる社会的、経済的の下部構造として解釈している (*Paul and Marriage and Celibacy: The Hellenistic Background of 1 Corinthians 7* [Cambridge: Cambridge University Press, 1995] 185)。
- 21 D. B. Martin, *The Corinthian Body* (New Haven: Yale University Press, 1995) 57。
- 22 修辞学的批評についての包括的な参考文献、概論については、D. F. Watson and A. J. Hauser, *Rhetorical Criticism of the Bible: A Comprehensive Bibliography with Notes on History and Method* (Leiden: Brill, 1994); B. L. Mack, *Rhetoric and the New Testament* (Minneapolis: Fortress Press, 1990) などを参照。
- 23 ニューレトリックの洞察を利用した研究はたとえば、E. S. Fiorenza, “Rhetorical Situation and Historical Reconstruction in 1 Corinthians,” *NTS* 33 (1987): 386–403; K. A. Plank, *Paul and the Irony of Affliction* (Atlanta: Scholars Press, 1987); S. M. Pogoloff, *Logos and Sophia: The Rhetorical Situation of 1 Corinthians* (Atlanta: Scholars Press, 1992); V. K. Robbins, *The Tapestry of Early Christian Discourse: Rhetoric, Society and Ideology* (London and New York: Routledge, 1996); A. C. Wire, *The Corinthian Women Prophets: A Reconstruction through Paul’s Rhetoric* (Minneapolis: Fortress Press, 1990); W. Wuellner, “Greek Rhetoric and Pauline Argumentation,” in *Early Christian Literature and the Classical Intellectual Tradition: In Honorem Robert M. Grant*, ed. W. R. Schoedel and R. L. Wilken (Paris: Etudes Beauchesne, 1979) 177–88などがあげられる。
- 24 代表例は、C. Perelman, and L. Olbrechts-Tyteca, *The New Rhetoric: A Treatise on Argumentation*, trans. J. Wilkinson and P. Weaver (Notre Dame/London: University of Notre Dame Press, 1969); C. Perelman, *The Realm of Rhetoric*, trans. W. Kluback (Notre Dame/London: University of Notre Dame Press, 1982)。議論法における現代方法論についての批判的考察については、F. H. van Eemeren, “Argumentation Theory: An Overview of Approaches and Research Themes,” in *Rhetorical Argumentation in Biblical Texts: Essays from the Lund 2000 Conference*, ed. A. Eriksson, T. H. Olbricht, and W. Übelacker (Harrisburg, Pennsylvania: Trinity Press International, 2002) 9–26などを参照。C. Perelman, and L. Olbrechts-Tyteca 以外の現代修辞学理論者は I. A. Richards や Kenneth Burke などをあげよう (G. A. Kennedy, *Classical Rhetoric and Its Christian and Secular Tradition from Ancient to Modern Times*, second edition, revised and enlarged [Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1999] 293–96)。

- 25 ペレルマン (三輪 正訳) 『説得の論理学 — 新しいレトリック —』、理想社、1980年、27頁。
- 26 L. F. Bitzer, "The Rhetorical Situation," *Philosophy and Rhetoric* 1 (1968): 5。
- 27 G. A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism* (Chapel Hill: University of North Carolina, 1984) 34。
- 28 C. C. Black, "Rhetorical Criticism," in *Hearing the New Testament: Strategies for Interpretation*, ed. J. B. Green (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1995) 264。
- 29 Perelman and Olbrechts-Tyteca, *The New Rhetoric*, 513。
- 30 Perelman and Olbrechts-Tyteca, *The New Rhetoric*, 508。
- 31 J. Barclay はコリント教会内に支配的な一貫した神学的気風があり、それをパウロが批判するべき標的にしていると述べている ("Thessalonica and Corinth: Social Contracts in Pauline Christianity," *JSNT* 47 [1992]: 61)。本小論ではこの書簡全体を通してパウロがある特定の人々を念頭に彼らの神学的もしくは思想的気風を批判していると想定する。4章18節で驕り高ぶっている「ある人たち (τινες)」の存在が明示されているがパウロはそのグループを議論の標的にしていることが分かる (Martin, *The Corinthian Body*, 67)。彼らの驕り高ぶった振る舞いはコリント教会内に混乱を引き起こし、パウロはこの書簡を通して彼らの振る舞いを是正するよう説論を試みているのである。
- 32 G. Theissen (*The Social Setting of Pauline Christianity: Essays on Corinth* [Philadelphia: Fortress Press, 1982]) の研究以降、パウロが創設したキリスト教会に集う者たちは異なる社会的・経済的背景を持っており、コリント教会では信徒間の経済的・社会的格差が諸問題に深く関係している、ということが研究者の間で同意事項として前提とされてきた。しかし最近 J. J. Meggitt は初期キリスト者は一枚岩的に貧しく、貧困にあえいでいる人たちであったと今までの同意事項を覆す主張をしている (*Paul, Poverty and Survival* [Edinburgh: T&T Clark, 1998])。その後の議論については以下を参照 (D. B. Martin, "Review Essay: Justin J. Meggitt, *Paul, Poverty and Survival*," *JSNT* 84 [2001]: 51-64; S. J. Friesen, "Poverty in Pauline Studies: Beyond the So-called New Consensus," *JSNT* 26 [2004]: 323-61; J. Barclay, "Poverty in Pauline Studies: A Response to Steven Friesen," *JSNT* 26 [2004]: 363-66)。
- 33 詳しくは拙論「第一コリント書におけるパウロの論敵についての一考察 — 社会的、文化的視点から」『基督教研究』68巻2号 (2006年12月) 58-77頁を参照。
- 34 R. B. Hays, "Conversion of the Imagination: Scripture and Eschatology in 1 Corinthians," *NTS* 45 (1999): 396。
- 35 K. Wengst, *Pax Romana and the Peace of Jesus Christ* (London: SCM Press, 1987) 19-21。なお、1テサロニケ5章3節で「無事だ、安全だ」というスローガンに対してパウロは終末的破滅の介入を述べているが、ここに帝国神学と皇帝崇拜への政治的抵抗を見て取れると主張する研究者もいる (H. Koester, "Imperial Ideology and Paul's Eschatology in 1 Thessalonians," in *Paul and Empire: Religion and Power in Roman Imperial Society*, ed. R. A. Horsley [Philadelphia: Trinity Press International, 1997] 158-66)。
- 36 ペレルマン、『説得の論理学』、31-61頁。



- 37 J. C. Hurd, *The Origin of 1 Corinthians* (New York: Seabury Press, 1965) 282-87。
- 38 J. L. Sumney, *'Servants of Satan', 'False Brothers' and Other Opponents of Paul* (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999) 16。

